

Richard Sennett, *Flesh and Stone*

その6: Each Man is a Devil to Himself
オーンバルド・ド・ロマーン

2008年度大学院講義 後期
鈴木繁夫

経済人と宗教人

- 中世の住民＝「ブルジョワ」
 - 都市外部からの影響を受ける受容者
 - 売買対象としての土地を所有
 - 土地を自由に改変する権利を持つ
 - 土地で仕事をする
 - 暦を自分たちで変える
 - 宗教
 - 土地への愛着
 - 祭事暦
- 挑発
- 同情

土地の違い

- 三つの区分
 - シテ cite: 城壁にかこまれた場所
 - ブール bourg: 教会・領主によって統治された場所
 - コミューン commune: 小農領主が集合した場所
- 建築工法の転換
 - 木製から石製へ
 - 窓ガラス、宝石、織物の壁掛け
- 道路
 - 個人使用、集落単位であったのでスプロール

経済活動

- **家屋の壁**
 - 祝祭市の衰退→中庭
- **経済時間**
 - 暁(パン屋)と黄昏(肉屋)
- **個人への暴力**
 - 飲酒がらみ←体を温める目的→痛みへの鈍感

経済的自由 から悪党的なもの

- 「市は都市の通りに毎週立つもの。」
 - 中庭・墓場
 - 国家権力の法と宗教法をかいくぐる

中沢新一『悪党的思考』

- ある男が

「大修道院に入っていったところ、その会堂にたくさんの悪魔たちを見つけた。ところが市場ではたった一匹の悪魔だけが高い柱の上 にいただけだった。男はとても不思議に思ったが、すると男はこう 教えられた。「会堂では誰もが魂を救われ神のところに行くように 準備されているから、修道士たちが迷うようにそれだけたくさんの 悪魔が必要になるが、市場では人間一人ひとりが悪魔だから、余 分に一匹入れば足りるのだ」(オーンバル・ド・ロマーン^{13世紀中葉})

人間一人ひとりが自分に対して悪魔

- 常識的見方

- 私は経済活動をすることで

- (1)他人に対して悪魔となる

- ∵私が利益を上げることが最終目的

- (2)自分の心に最善なものに無感覚になる

- ∵他者への同情がなくなる

- セネットの見方

- 放埒な経済競争＝自己破壊的

- “Unbridled economic competition could prove self-destructive” 200

市民社会

- ヨーロッパ思想史文脈

- 古典的

- 都市国家に対して特権と義務を負うがゆえに自由が保障されている」

- 近代的

- 「ブルジョワジーが中心になって作りだした自由な市場経済の社会」

- (佐伯啓思『「市民」とは誰か』)

- 日本的文脈の「神聖な言葉」

(1) 「市民」は、それぞれの職業や生活の場を持っている。

(2) 「私的」な関心から、統治権力に、私的な権利や利益を主張する。

(3) 横断的な関心の共通性ができる = 統治権力への批判的姿勢

(4) 欧米の「市民」はすでに(1)-(3)を確立しているという幻想を共有する

(5) 日本の「市民」は未熟で(1)-(3)を確立していないという幻想を共有する

(6) 日本では、民主主義・人権思想・個人的自由といった観念が未成熟

単なる反権力

(佐伯啓思『「市民」とは誰か』)

ギルド

- 相互機制と政府統制
 - 複数の独立した同種の業者による連合
 - 共通利益による業者間の過当競争排除
 - 勅許によるギルド相互の棲みわけ・ギルド内の規則
- ↓
- 製品の品質保証と価格安定

↑
「差違が価値を生む」(マルクス)

12世紀頃からギルドに亀裂が入る

→市場経済はいつも外部を必要とする

University vs. Feudum

- 自治団体university
 - 独立した裁判権をもっている団体
 - 勅令(charters of liberties)によって特定の活動の自由が保証
 - 許可された自由範囲でその内容を改変できる
 - 本来は土地をもたない
- 封建契約feudum
 - 契約変更の裁量権がない

自律運動体

- ギルド＋自治権
 - メンバーが指定範囲内で規約変更
 - 団体の機能が変わっても、組織は不変
 - 新しい状況に対応できる

経済の時間と基督教の時間

- 経済の時間 ← 人為的な介入
 - 時給、入出荷のタイミング、高利貸し
- 基督教の時間
 - 基督の生涯は今の私の生涯と重なる
 - 基督に倣うこと ≠ 時計の時間
 - 告解で重要なのはその行為と密度

~~時計時間の長さ~~

経済的人間 homo economicus

- 自己利益を理性的かつ効率的に追求する人間
- 経済的人間が生きているのは
空間のなか ~~場所のため~~
- 空間
 - 人為的操作が可能
 - 時計時間をどう扱うかで空間の質が決まる
 - キリスト教信仰やそれが教える歴史とは無関係



最後の審判で地獄行き

キリスト教側の反論

- 中庸modestia

「仕草、ふるまい、その他のあらゆる行為が、足りないことはなく、逆に過剰であることもない」(コーンシュのギヨーム 初期スコラ哲学者)

- 誠実な人prudhomme

勇敢さに知恵と中庸がある (聖ルイ9世)

イカロスの死(1)

- ブリューゲル「ゴルゴダへの道行き」
 - 苦難への応答と苦難による連帯
 - 十字架が画面中央に落とされている
 - キリストが小さく描かれる
 - 世俗の地は冷たい不毛、キリストへの無関心



イカロスの死(2)

- ピエロ・デラ・フランチェスカ「むち打ち」
 - 二つの異なった空間が接合している
 - 息子を失った二人の父親
 - 都市における「キリストに倣うこと」の一例



イカロスの死(3)

- ブリュウゲル(子)「イカロスの墜落」
 - 社会ではなく世界がある
 - 不条理なことはすべて人間側の勝手な判断
 - 不条理は世界には存在しない
 - 同情はなくても世界は続く



